

## ビクトリア時代と英国近代児童文学

猪熊 葉子

## 一

児童文字という特殊なものが文学の領域の中に存在し始めたのはさして古いことではない。児童文学なるものの定義については、まだ確立されたものはないようだが、児童文学とは、子供のために書かれた文学であり、子供を讀者として予想しなければ成立し得ないという点については、誰しも一致している。

こういう定義にあてはめることの出来る児童文学は、何処の国でも近代にならなければ出現しないのであるが、特に、教訓性、啓蒙性といった功利性を作品から追い出して、純粹に子供の喜びのために書かれた児童文学の歴史は極めて新しいのである。こういう子供のための文学を比較的早く成立させた国の一つに英国がある。そして英国は時間的に早く子供のための文学を創り出しただけでなく、その質と量に於いても世界の子供たちに大きな貢献をしている。

英国の文学の歴史のなかには近代以前にも子供の姿がなかつたわけではなかつたが、それらは何れも偶然的な存在でしかなかつた。始めて子供を文学の重要な主題としてとりあげたのは、十八世紀初頭にかけて現われたローマン派の詩人たちであつた。

ブレイクは世の「経験」の苦渋に対して、子供の「無垢」の美しさを高く評価しているし、ワーズワースは「子供は人間の父」とまでいつて、子供を成長・発展のシムボルとしてとらえている。このローマン派詩人たちによる子供の発見は、ビクトリア朝の児童文学の精神的背景として、きわめて重要な意味を持つていると考えられる。

しかしながら、彼等の子供に対する興味の質は、ビクトリア朝の子供たちのための話し手たちのそれとは異つていた。「子供について語り乍ら、彼等は人生について語つていた」のであつたから。彼等の発見した「子供」は十八世紀を支配して来た「理性」に対する「感性」の解放の象徴なのであつた。

ビクトリア時代の初期、一九四〇年代の終りに近く、近代英国児童文学の父ともいえるエドワード・リアや、ルイス・キャロルの出現以来、「子供」を自己追求の媒介物としてとりあげるのではなく、子供のために書こうとする人々が相次いで出てき、英国文学史中の特異な現象となつた。そして勿論これらが、近代児童文学の形成者と呼ばれるべき人々であるのだが、何故或る時期に至つて、大人は子供の姿をかりのをやめ、積極的に子供に向つて書きはじめたのかといふのは、非常に興味ある問題である。

近代文明の進歩による子供への認識の深化の結果であるとか、教育の充実によつて子供の読書欲がたかめられ、彼等が新しい読者層を形成しつゝあつたからであるというような理由は、何れも事実であつて否定出来ないが、それは理由の全部ではあり得ない。そこには子供のために書くことを欲した大人の主体的な理由があつた筈である。

英国近代児童文学の性質は、この理由を説明していくところから明らかになれると思われるが、そのためには、そういう欲求を人々の心の中に起させた時代の精神的風土について知ることが必要であらう。

一八三八年から一九〇一年まで続く、ビクトリア女王の治世は、英國歴史の中でも最も偉大な時代の一つであり、エリザベス女王以来といつてよい大英帝國繁栄の時期であつた。もとよりそれは英國の近代化を順調に進行させた産業革命の成功のもたらした結果であつた。

「ビクトリア時代には、大多数の人々の生活は、社会が伝統的に上・中・下の三段階に分けられていたという事実によつて単純化されていた。人々はそのどれかに生れ、誰もがその分を心得、それを守る筈であつた。」

社会が大体において三つに分かれ、人々はその分を守る筈であつても、階級の勢力には自ら差があつた。この時代に最も勢力があつたのは中産階級であり、その社会の凡ゆる面における台頭がこの時代を特徴づけていたことはよく知られている。人が「ビクトリアン」(ビクトリア朝人)という言葉を用いるとき、それは産業革命によつて富を蓄積し、社会の中核たる自信と誇りにみちていた中産階級を指していたのである。

彼等中産階級の人々は、「現実的な男、事実と打算の男、二と二をたせば四であり、それ以上のなものでもないという信条に従つて進む」というタイプの人間であつたと、P・E・ベルギーニは表現している。

物質面のみでなく、精神面における中産階級の台頭を、自らその階級に属しながら、一程の危機感をもつて眺めていたのがマシュー・アーンホルトであつた。

「人が今日の十人のうち九人までの英國人のように、我々の偉大さと幸福は、我々がかくも富んでいることによつて証明されると確信したことはかつてなかつた。」と彼はいう。しかし、「これらの人々を、その生き方を、彼等の習慣、ふる

まい、その声を考えてみよ。彼等を注意深く観察してみよ。彼等の読む文学を、彼等に喜びを与えるものを、その口から洩れる言葉・精神を形成している思想を観察してみたまえ。どんな富も、それが人をこのような人間にする条件となるのなら、果して持つ価値あるものであるのか？<sup>(6)</sup>

アーノルドはこのような中産階級の人々に「俗物」という名称を与え、そのものの考え方が国民全体のメンタリティに与える影響をうれい、「教養と無秩序」という書をあらわしたのであつた。

彼は富そのものが目的であると考え、「俗物」たちの誤つた考え方は、国をあやまるものであり、そこから起る「無秩序」を救うものとしての「教養」を考えた。アーノルドの定義に従えば教養とは、人間性を美しくかつ価値あるものにするすべての力の調和的發展であり、従つてそれは精神の完全性という觀念に到達するのである。

五〇年代・六〇年代はビクトリア時代の成熟期であつた。産業は進み、中産階級は労働者階級の犠牲の上に、彼等の平和と富を楽しんでいた。この幸せな現状を維持するためには妥協<sup>コン compromise</sup>の精神が必要であつた。現実にはほぼ満足するようにかたまつていきつあつたのだから、それを大切に保つていくことが彼等の理想であつたのである。

アーノルドと同様、ビクトリアンを心から愛しながらも鋭い批判の眼をむけていたG・K・チェスタトン<sup>(7)</sup>は次のようにいう。

「ビクトリアンが彼等の想像力に許す唯一の超自然主義は悲観的超自然主義である。彼等はお化けの物語はもつけれども、聖人の物語はもたない。」<sup>(6)</sup>

人が完全性の追求の中に、世間的な欲望から完全に自己を解放し得たとき、その人は聖人になつたのである。しかしビクトリアンはあまりにも現世に執着していたから、成仏出来ず、妖怪となつて地上をさまよわねばならないのである。こ

れは確かに人間性の悲劇に外ならない。

このように要約されることが許されるなら、標準的ビクトリアンの精神状態は右のようなものであつた。彼等の世に処する時何より必要であつたのは前にも述べた妥協の精神とともに常識であつた。何故なら常識とは「対象の変る毎に觀念を変え乍ら、絶えず適応し、再適応していく一つの精神の努力である。それは物の動きに精確に適合していく理知の働き」であり、安定した一つの状態を継続していくための欠くべからざる論理であるから。

ビクトリアンは彼等の築きあげた世界を守るために妥協し、又そうすることが常識人たる所以であつた。しかし常識人は往々にして彼等の常識の枠からはみ出るものを認めようとしないくなる危険性をもつ、よい意味における常識―良識といつた方がよいかも知れぬ―は、本来柔軟な適応性を特質とするのだが、わるい意味での常識は或る範囲内においてのみ敏感にものに適応する傾きをもつのである。アーノルドがこれを中産階級の一柔軟性の欠除、物事を他方面からみることに「おける不適応性」として指摘している。

世の中が安定すればするほど、この常識の枠は強固に出来上つていく。そして或る人が、自分自分の中に、世の常識の枠に適応出来ない部分があることを感じるとき、その人間の精神は、不適応者としての一種の罪の意識を自覚するところから全く不安定なものになつてしまふ（例えばルイス・キャロルにはこの罪の意識が明瞭にみとめられる）。そして或る理想をもち、世の常識を価値なきものとして超越しない限り、「生活に対する我々の不断の注意の継続」である常識は人を神経衰弱へ追いやるのである。

おもてむきは繁栄の時代であつたビクトリア朝にこうした不安な精神の持主が存在したことは重要な意味をもつ。そしてそこでそういう人々は精神の衰弱を防ぐ方策を意識的、無意識的に発見しようとしていたということを忘れてはならな

- 2 Mark Edward Perugini, VICTORIAN DAYS AND WAYS p. 31.
- 3 前掲書 p. 227.
- 4 Mathew Arnold, CULTURE AND ANARCHY, p. 48.
- 5 同 右
- 6 G. K. Chesterton, THE VICTORIAN AGE IN LITERATURE, p. 131.
- 7 ヘルダグン 林達夫訳「笑」一七七頁(岩波文庫)
- 8 Arnold, p. 45.
- 9 ヘルダグン前掲書一八八頁

### 三

ビクトリア時代の文学の特色の一つは、ギヤスケル夫人を始めとして、ブロンテ姉妹、ジョージ・エリオットなどの偉大な女流作家が、多くのマイナーの女性作家と共に輩出し、小説という形式の中に、彼女等の表現を見出したことにある。この文学史上の現象と児童文学の誕生は表面何のかかわりもないようだが、底では深い関係を持つていると考えられる。

「これら偉大なビクトリア時代の女性たちが或る種の不安をその魂の中に感じていたということは或る程度まで真実である」<sup>(10)</sup>とチェスタトンはいう。

「この新しい芸術の形式、それを我々は小説と呼ぶが、その鍵は共感にある。そして共感はずべて感じるものが対する深い感情を意味するというよりは、すべてのなやめるものと共になやむことを意味しているのだ」<sup>(11)</sup>というとき、彼はまさ

しくビクトリア時代の文学の性格を適確に表現しているのだ。

エリス夫人という作家があつて、「イギリスの女性」とか「イギリスの娘たち」などというポピュラーな人生案内のシリーズものでビクトリア時代の人気作家であつた。彼女は女性にかしく身を処するための知恵を与えようとしていたのだが、彼女の意見によれば、女性の幸福は家のよき母、妻、娘たることにあつた。この時代の女性たちは「男性」につかえるものであり、「レディファースト」という結構な標語はビクトリアンの生活の中では、まだ生きた信条とはなり得ていなかつた。エリス夫人がその幸福論を、すべての点に於て、女性は男性に劣つてゐるという前提の上に立つて進めていたのは甚だ現実的な、その限りではかしくい方法であつた。女性の場は家庭の中にあり、そこでは男性が家長として君臨していたのである。こういう女性の生活が閉鎖されたものであつたのは当然であつた。

こういう時代の雰囲気の中で、当時の女性の中から、閉鎖的な生活の枠から抜け出て、人生の可能性を探し求めようとするものが出てくる。そういう女性たちのあるものが、築きあげたのが小説の世界であつた。もとより彼女たちは、現実の世界の秩序を転覆できるほどよくはなかつた。又、彼女等を困む現実に不満を感じていたとしても、世捨人になることも不可能であつた。しかし想像力によつて架空の世界を創り出し、その中に現実には見出すことの出来ぬ、より豊かな生の可能性を探ることは可能だつたのである。そしてその行為の中で、彼等は精神の自由を獲得した。いいかえればこれら偉大なビクトリア時代の女流小説家たちは、小説の世界を築くことを通して時代の「俗物」精神の批判者としてたちあらわれたのであつた。彼女等にとつて書くことは生きることを意味していた。

しかし右のような方法のみが精神の不安を解消する方法ではなかつた。この時代には、もう一つの注目すべき精神安定法を発見した人々があつた。それは物理的には社会の有用な一員でありながら、精神的に、一時的に社会からの逃亡をは

かつた人々である。彼等は意識の上ではあくまでも標準的ビクトリアンであつた。そしてその常として現状は維持されねばならぬと考へていた。しかし意識下に於いて彼等の精神はゆれうごいていた。社会の一員たることをやめる意志はつゆほども持たなかつたが、時代の空気の中に何か彼等の精神を不安にするもののあることを感じていたのであつた。

そこで彼等はかしこくも、一時的に精神的休暇をとることを思いつくのである。そして大切なことは、ビクトリア時代のいわゆる児童文学の生産者たちが実はこういう精神の持主だつたことである。

例をルイス・キャロルにとつてみよう。ハーバート・リードは、キャロルの「不思議の国のアリス」は「強烈に抑圧された個性」<sup>(13)</sup>の産物であるといつてゐる。

英国国教の牧師の家に生れたキャロルの生活は、生れた時からほぼ決定されていた。彼の一生はその父の一生の正確な写しとなるはずであつた。期待にそむかず、彼はオックスフォードに学び、牧師として叙品され、成績優秀であつたために、名門クライスト・チャーチのカレッジの論理と数学の講師ドンとして、一生の殆どを保守的な十九世紀のオックスフォードで送るのである。牧師として、教師としての威厳を保つために彼の生活は「してはならない」ことにみちていた。楽しみにしてゐたたまのロンドンでの芝居見物も、僧職にある教師としては当時最もふさわしからぬ行為であつた。加えて彼の内向的な性質と、ほんの僅かの誤謬も許されない学問のきびしさ、こういう彼が精神的休暇を必要としない方がどうかしているだろう。

彼は親友である子供たちにむかつて奇想天外な物語をきかせる時にだけ僅かにすくわれていたのである。教師チャールズ・ドヂソンがルイス・キャロルの名のもとに語つてゐる時、彼はドヂソンの行為とは没交渉である。又そうでなければ意味がない。しかしルイス・キャロルがドヂソンそのものになりかわることは許されない。それはあくまで一時的なもの



でなければならぬのである。この精神生活における二重性が、彼と終生光榮あるクライスト・チャーチから外にふみださせなかつたのである。

彼の態度は前に述べた女流作家たちの、書くことは生きることであるといふのは全くちがつていた。彼の欲したのは休養であり、彼が本来あるべき状態を維持するエネルギーを必要としたに過ぎなかつた。

そして、彼のみでなく、他の多くのビクトリア時代の子供たちへの語り手たちが、児童文学の専門家ではなかつたことは右のような理由によるものであつた。彼等の行為は余技であり、それによつて生活の意味が変えられてはならぬものであつた。素人であり、その分をわきまえていなければ彼等の行為の意味はなかつたのである。

10 Chesterton, p. 72.

11 Ibid., p. 61.

12 ハバート・リード 宇佐見英治・増野正衛訳「モダン・アートの哲学」一五五頁

#### 四

ビクトリア時代の中産階級は、繁榮の時代にいき、その生活に満足している筈であつた。にもかかわらず、奇怪なことに、その背後に精神の不安定を感じている人々があつたのだ。そしてこの精神的不安は、時として現実生活に影響を及ぼさないとはいえなかつたのである。彼等にはリクリエーションが必要であつた。さもないと気狂いになつてしまふかも知れない。

標準的ビクトリアンは度々いうように「現実的な常識人」と定殺出来るであらう。若し一時的に世の中を支配している

常識に休暇を与えたらどうなるだろう。そこにあらわれるのはノンセンスの世界である。

しかし時代の壁はかたかつた。威厳を示さねばならぬ大人が冗談をいう、とんでもない話だ。従つて彼等には口実が必要だつた。

常識をひつくりかえしたノンセンスなことを話しても恥しくないのは誰か。子供である。ノンセンスもそれが子供にむかつて発せられるとしたら大人の面目もつぶれまいというものだ。こうして誇張していうならビクトリア時代の大人は子供をだしにして気ばらしをすることを思いつくのである。

どんな面白い本が子供のために書かれても、彼等に読む能力がなければ意味がない。しかし十九世紀も後半に入る頃には子供たち（もちろん本をかつて貰える階級の子供たち）は、新しい読者層を形成することの出来るほどに教育されていた。

十八世紀におけるニューベリーの出現以来、既に子供のために書かれた本は存在していた。その中には自ら流行の変化があつたが、十九世紀初頭には、昔から子供たちに親しい存在であつたフェアリーたちは、教育的でないという理由で子供たちの前から姿を消してしまつていた。現実的な眼でみればめにみえないフェアリーなどは存在価値がなかつたのだ。しかしビクトリア時代に入つてから、人々は徐々にフェアリーとのつきあいを回復しつつあつた。フェアリー・テールがぼつぼつ出版されるようになってきたのは、そのあらわれであつた。

その頃子供たちは、ためになる本にあきて純粹にたのしみのためによむことのできる本の出現をまつていた。

よく知られているように、ビクトリア時代中産階級の子供たちは大人の生活と全く切り離された子供部屋チャイルドルームの住人であつた。そこには乳母の性質によつて「たのしい安全な天国ともなれば、苦しみの場所ともなる」<sup>(13)</sup>ところだつた。子供たちは

そこでやがて有用な大人になるべく、厳しいしつけのもとに教育され、生活していた。

子供部屋の一日は「時計の針の規則正しきで進められ<sup>(14)</sup>ていく楽しい筈の日課の散歩でさえも、きまつたコースをいつもの歩調で歩くのでは楽しいものにはならなかつたと、或るビクトリアンは幼時を回想している。

子供部屋の住人たちの経験は全く限られたものであり、従つて子供たちもこの閉鎖的な世界から逃げられれば逃げだしたい欲求を持つていた。しかし彼等はトム・ソーヤーやハックのように逃亡をはかるわけにはいかない。とすれば彼等が逃げこめるのはその想像力で作りあげる遊びのなかか、本の世界である。ビクトリア時代の子供部屋の子供たちをリアルな方法で描写したものの中に、「魔法のカーペット」や「魔法の船」によつて不思議の国の探検に逃げ出したい子供たちの姿が多くみられるのは、極めて自然なことであつたといわなければならぬ。

子供たちは新しい本の出現をまつていた。

13 Magdalen King-Hall, THE STORY OF THE NURSERY, p. 207.

14 Ibid., p. 238.

## 五

今迄みてきたような状況の中に、子供のために書かれた本は遠からず生まれる筈であつた。そしてそれに応えるように一八四八年にはアンデルセンのお伽話の翻訳があらわれ、ままエドワード・リアによる記念すべきノンセンス詩が出現した。そして次いでキャロルの「不思議の国のアリス」の出現によつて、児童文学の歴史ははつきりと新たな段階にふみ入つたといえる。

これらの子供たちへの語り手たちの作品には二つの大きな特色があつた。一つは前に述べたノンセンス—ノンセンス常識コンシキのうらがえしであり、もう一つはその幻想的な性質である。

前述したように現実社会から一時離れて精神的休暇をとる場合に、ノンセンスが大きな役割を果たした。しかしノンセンスがコモンセンスであるような場所は何処へ行つたらみつかのらうか。「不思議の国」に行けばよい。キャロルは「不思議の国」で、精神の不断の緊張である常識から解放されるのである。

そしてその世界は常識を如何に働かしても理解することの出来ない奇妙な、つまり不思議なもので成りたつてゐる世界である。我々が手近かに探すことの出来るところにそういう世界があるだらうか。

それを探すためには、アリスに従つていけばよい。アリスは夢の中で、白兔のあとを追いかけて不思議の国にみちびかれる。

「夢は一つの弛緩である……物から身を解脱して、しかもなおその形象を認める。論理と縁を切つてしかもなお諸観念だけを集める。それはただもう遊戯であり、若しくは面白いだけば怠惰に外ならない、だからこそ喜劇的虚妄が何よりも先ず観念遊戯の印象を与えるのである。我々の第一の運動はこの観念遊戯に我々を結びつけることである。そのことが思考する労苦から息をつかせてくれるのである」<sup>(16)</sup>

ノンセンスと夢とは、一時的であるという性質において共通している。人は絶えずノンセンスをいつてゐることは許されない。若しノンセンスをいうことが或る人の常態となつたらその人は気が狂つてゐるのである。同様に人がねむり続けているとしたら、その人は病気に違ひないのである。何れにせよ、この二つは、一時的であることによつてのみ、人間の精神衛生に役立つのである。

キャラルの偉大さは、この二つの要素を結びつけ可視的な世界の中にくりひろげ、それを意識的に人々に提供したところにある。

この二つの要素を今度は子供の側からみてみよう。それにはここで我々はもう一度子供部屋の子供たちの心理をおもいださねばならない。

前にいつたように、彼等の生活は閉ざされており、彼等はその世界から抜け出した要求を持つていた。そのいう心理的欲求を持つ子供たちが望むものは、驚くことだつた。時計の針のように、規則正しく進行する生活の中に驚きはあり得ない。子供たちは次になにかくるかちやんと知つていたのであるから。彼等の日常性を全くひつくりかえすような驚きにみちた世界がほしいのだ。それが「不思議の世界」であつた。

大切なことは、その「不思議の国」で、大人と子供が出会つたということである。そして考えてみれば、この国ほどの両者の出会いが無理なく行われるところはあり得なかつた。「不思議の国」の住人は大人でもなければ、子供でもない、不思議な存在である。C・S・ルイスのいうように、そうあることが、必要条件である。彼等は大人と子供に、年齢と経験と知恵のへたたりを忘れさせる存在でなければならぬのである。

この時代の現実生活の中では、大人と子供は出合わないのだつた。「子供はみられてもよいが、聞かれてはならない」<sup>(16)</sup>のであり、大きな家になればなるほど子供は大人から遠ざかり、「みられる」光榮にさえ浴すことはむづかしかつたのである。

大人と子供は手をとつて「不思議の国」に入つていく。一時の冒険ののち彼等は現実世界に戻り、再びそれぞれの分をわきまえた大人と子供にかえるのである。そうすることが健康なビクトリアンであつた。もつとも時にはその世界に

入りこんでしまつたまま帰つてこない子供もある。ピーター・パンがそれだ。ピーター・パンの姿が時にものがなしくうつるのは、現実に戻るあしがかりを失つてしまい、永遠に幻想世界の住人になつてしまつたからである。

キャロルの出現以来、英国が近代幻想童話の主要生産國となつたのは、恐らくこのビクトリアンの精神のボタンが近代英国人の精神の中に今日に至るまで残つてゐるからではないかと思う。

15 ベルグソン前掲書一八八頁

16 英国における諺の一種。子供は両親にその姿をみられてもよいが、決して声をきかれてはならない。つまり子供は大人の生活にたち入ることは許されない。子供はその分を守れという意味、現代でもこの諺は生きている。

六

今迄述べてきたことは、決して、近代の児童文学の型が、本来幻想的な童話に限られるということの意味するものではない。何故なら、時期を同じうして、子供たちの姿をリアルな方法で描いたものもあらわれているからである。しかしこの種の作品の性質を考えていく時、我々は一つの疑問にいきあたる。それは、これらの作品の中にあらわれる子供たちの姿が、一般の小説の中にあらわれる子供たちの姿とあまりに違ふ、という事実である。前者の中にみられる子供たちが、楽天的な、子供らしい子供であるとすれば、後者のうちにみられる子供たちの顔には苦惱のしわが深くきざまれている。この違いはどうして出てきたのか。

十九世紀の初期までに、ロマンティックな子供の概念が成立していた。それは前述したように、感性の解放の中にあらわれた成長、発展の詩的シムボルとしてであつた。しかし十九世紀英文学の重要な転換期(三〇年代、四〇年代)に於いて

は、子供は虐げられたもののシムボルとしてあらわれる。ディッケンスの「オリバー・トゥイスト」や「ドムベイと息子」などはその適例としてあげられよう。オリバーは当時の社会の矛盾を一身に集めた悲劇的な少年であるし、ポール・ドムベイは、富の追求の中に人間らしい愛情も想像力も枯らしてしまつた父に、心理的に殺されるのである。オリバーが「(たべものを)もつと下さい」と孤児院でたのむ時、又死の床にあるポール少年が、父に対して「お金はお母さまも僕もすくえなかつたね」という時、ディッケンスは彼等の姿をかりて当時の社会と人生への根本的な批判を行つてゐるのだ。みおとしてならないと思われるのは、子供が大人と同次元でとらえられた時、人はもはや子供の無垢や成長の姿を信じることが出来なかつたということである。ピクトリア朝の小説にはしばしば早死する子供の床のシーンがあらわれるが、それは当時の社会状態の一つの表現に外ならなかつた。苦しむより子供のうちに死ぬほうがましという考え方が、心のどこかになかつたら、こういうシーンは作品の中にあらわれはしなかつただろう。これをピクトリアンのセンチメンタリズムの結果であると考えるのは、皮相的な観察である。

その反面児童文学の世界の子供たちはなんとこのびやかに、楽天的なのだろう。そしてこういう楽天的な子供たちの姿を描いたのが多く女性作家であつたということは興味のあることだ。これは一つには、女性の方が子供をより入念に観察する機会を与えられていたことによるものだろう。ピクトリア時代は男性専制の時代であり、男性は子供たちとあまりかわりをもつていなかつたから。しかしこれだけで全部を説明出来ない。幻想的な童話を書いた大人たちに心理的な理由があつたように、これらの作家たちにも、楽天的な子供像を描きたい心理的な理由が同様にあつた筈である。

この時代の女性たちはチェスタトンのいうように一種の被圧迫者であつた。彼女等の魂は不安にみちていた。男性が人生の表側を歩いているとすれば、彼女たちはその裏側、或いは片隅の存在であつた。そういう場所にいる女性たちが、同

様に片隅の存在であつた子供たちに「共感」を覚えたのは自然なことであつた。

しかし彼女たちはディッケンスのように「子供たち」の姿を通して社会を批判しようとはしなかつたし、ブロンテ姉妹たちのように「生きる」ことを望まなかつた。彼女らの大部分は、家庭人であり、家庭をいとなむことが彼女らの「生」の目的であり、過程であつた。子供たちへの共感をてがかりにして、彼女たちも精神的休暇をとろうとしていたのである。彼女たちにとつて、ディッケンスの作品の中にあらわれる子供たちは救いとはならない。彼等は一樣にきびしい現実の中で不幸であつたし、年もいかにのに既に大人の持つ知恵をもたざるを得ないような子供たちであつたから。

子供は子供っぽいほどよいのだ。ビクトリア時代の現実の中で、子供っぽさは、彼女らをしばる「常識」から遠いもの、それだけに「可愛らしい」ものであつたからである。

その「子供っぽさは」大人と子供が同次元におかれた時、かげをひそめる。子供部屋という大人のたち入らない世界においてのみ、子供はその本来楽天的な姿をあらわすのだ。リアルな方法でかかれたビクトリア時代の子供のたの作品が、一樣にその舞台を子供部屋の内部か、年一度の子供の解放の時、夏休みの田舎の家にとつているのは偶然ではなかつた。

又この種の物語の主人公たちが中産階級の子供たちであるのも必然的であり、これは長い間、(甚だ日本的な呼称であるが)英国の生活話の伝統となつた。始めて下層階級の子供を主人公にして成功した作品と考えられるイヴ・ガーネットの「袋小路一番地」が現われたのは、実に一九三七年のことであつた。

## 八

要するにビクトリア時代の児童文学の作り手たちは、切実な切実な精神的欲求から子供にむかつて書いたのであつて、



この現象は決して偶然の所産ではなかつたのである。

子供たちも勿論新しい読物の誕生をまちがれていたのであるが、彼等は大人のだしにされている感はずぬかれない。その意味でビクトリア時代の児童文学は、二十世紀の児童文学とはつきり区別して考えられなければならないのではないかと考える。

「どの紳士のライブラリイも『不思議の国のアリス』なしには完結しない」とチェスタトンはいう。「そしてそれは恐ろしい真実だ」<sup>(18)</sup>。この言葉は大人たちの精神的欲求の深さを考えなければ理解出来ないのではないだろうか。

前にも述べたように、ビクトリア時代児童文学の作り手たちの態度はローマン派詩人たちがビクトリア朝小説家のあるもののように、「子供について語りながら人生について語る」態度とは根本的にちがっている。彼等の目的は人生の探求にあるのではなく、休養にあつた。彼等は子供にむかつて語りながら、現実の世界のもつ枠を精神が何時か超えることのないよう、たずなを握りしめ、その内部に安住出来るように、有効な方法を考えついたのであつた。子供に語りかけることによつて大人の世界から離れること、そこで常識の世界をくつがえして笑い、世の論理から自由になること、これはチェスタトンのいうように、ビクトリアンの発見したもののうちで最も独創的なものであり、英国人の精神の歴史の中で劃期的なことであつた。それは「恥と悲しみをもつて顧みる必要のない確かなもの」<sup>(19)</sup>であつたのである。

これは結局ビクトリアンの環境に適應するエネルギーの豊富さを示すものであり、如何なる意味においても児童文学はビクトリアンの信条であつた妥協の精神の見事な發揮であつたといえるだろう。

ビクトリア時代の児童文学とは右のような性質をもつ文学であり、ビクトリアンをアーノルドにならつて精神的に三段階に分類してみれば、文学することが真に生きることを意味した人々は上流階級であり、富の追求がそれ自体目的であり、

喜びであつた「俗物」たちは下流階級であるとすれば、児童文学の作り手たちは、丁度その中間、中流階級にあたるといえるだろう。どうやら児童文学というものは最も中産階級的なものといえそうである。

とに角、ビクトリア時代に近代児童文学がこのような精神的風土に芽を出し育つていったということは、二十世紀の児童文学を考える時、よい参考になると思う。

17 G. K. Chesterton, A HUNDRED OF AUTHORS

18 同 右

19 ルイス・キャロルの言葉 Peter Coveny, POOR MONKEY より引用

(一九六〇・一・一九)